

特集

コメント3

「震災復興学を構築しよう」

池 上 惇（市民大学院世話人代表）

ただいま、ご紹介をいただきました。池上と申します。実は、先日、吉田分校の東側を歩いておりましたら、ばったりと、諸富徹先生にお会いしまして、市民大学院では、震災のことでいろいろと、苦慮しており、財政学研究会のほうで、ご支援いただけないかと申しあげました。では、ということで、この機会をいただきました。関係各位に厚く御礼を申し上げます。

この4月1日から市民大学院を四条烏丸の南西、成徳学舎で発足させ、社会人・経営人など、多数お越しになりました。そのなかで、お一人、お一人の文化資本を持ち寄っていただいて、いい知恵を出して、震災復興に貢献したい。このようなご提案がありました。

市民大学院の、いわば共通の研究テーマとして、現地の支援と合わせて震災復興の研究に取り組み、「人間復興・文化による‘まちづくり’」の構想を一人一人が持ち寄って交流する。その中から新たな方向を創造的に発見したい。復興構想は、被災地の現場と、京都のまちづくり現場をつないで、連携しながら進めようということになりました。

とりわけ、被災地の中でも、福島は、原発事故による放射性物質被害が凄まじく、また、福島大学は、日本における「地元学」の発祥の地です。被害を克服して、地元からの「人間復興・文化による‘まちづくり’」を、文化経済学発祥の地である京都の研究者・社会人とともに考えたい。これが、お願いの内容でした。

清水修二先生は、京都で、イギリスの都市政策を研究され、福島で、地元学の継承者として活躍され、その視点から、原発問題にも厳しい視線を注いでこられました。今日、改めてお話を伺いました。内容は、日本の東京駐在人は、アメリカの意を受けながら、原発や基地など、迷惑施設を低所得地域に持ち込み、地方の地元資源を濫用し、補助金などに依存させることによって、大都市の快適さと安全を、実現したこと。

長年の御研究の中で、実感されていたことを知り、深く感動いたしました。また、放射性物質汚染を正確に認識して、的確に対処するには、危険だから逃げ出す姿勢ではなく、積極的に汚染と向き合い、生活と生命をかけて汚染物質除去・原発撤去・積極的な産業再生や地域づくりに全力を挙げることを、お教えいただきました。

私共も、決意をこめて、現地の「人間復興・文化による‘まちづくり’」を担う人材の育成にご協力し、ともに、重荷を担ってゆきたいと考えております。

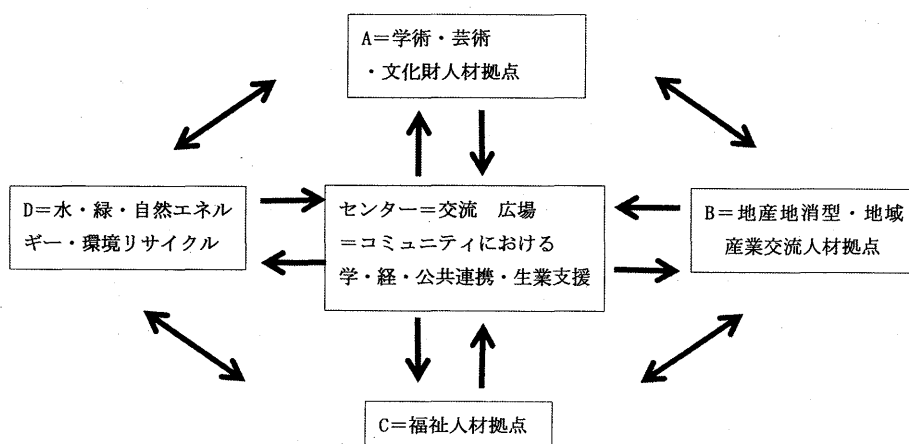
本日のお話で、市民大学院の「震災復興学」を構想し、研究し、実践に生かす体験をぜひとも共有してゆきたい。そして、「震災復興学とは何か」ということを、本日は見通しをつけて

帰りたく存じます。これがはっきりいたしませんと、支援と申しまして、そう簡単なものではございません。非常に厳しいことで、山を越え、谷を越えて行く覚悟をし、本日はその足固めということで、お願いを申し上げます。

震災復興の広場を創る

私の話題は、市民大学院の方で震災復興研究会をつくりまして、毎週、研究を積み上げました。A4一枚にまとめますと、次のようになります。

人間復興「文化による『まちづくり』」構想図



現在、注目されているのは、防災や災害復興だけでなく、地域の再生とまちづくりについての専門的な知見をもつ人材、市民、自治体職員などから、震災復興を「文化による『まちづくり』と結合し、総合的な地域再生をめざす動きであります。

また、この動きは、日本の文化的伝統である「知識結」の現代版によって推進されているといえるでしょう。

ここでは、地域の人々が、それぞれの文化を携えて、交流する「場」を構想し、構築できるネットワークが形成される。このネットワークは国内外に開かれていて、地域外から多くの人材が参加する。「場」には、センターと周辺を構想するというわけですね。

1. センター＝コミュニティ・交流人材センターの構築。その中軸は、民主導の連携チームづくりである。

- ① 知識人（学者、郷土研究家、医師、芸術家など）。
- ② 経営人（商店街や地場産業・農林漁業経営、金融・マスコミなど多様）。

③ NPO, 行政など公共人(非営利組織, 自治体, 政府関係機関など).

いわば, 学・産・公共のネットワークである.

このネットワークは, 地域コミュニティ基金を構築し, 地域通貨を発行して, 貸し手と借り手の顔が見える関係. 無利子・無担保・弾力的期限・相互支援を構築する.

現場を結ぶ交通・通信システムの構築

基金の活用は, 地域の広場と各拠点を結ぶ交流・交通・通信システムの構築を主要な対象とする.

現場からのコンテンツ創造・発信

また, 人々が行き交い, 対話するなかで, 地域の文化資源を生かす取り組みを進め, 地域ブランドのコンテンツ・学術研究成果・芸術作品・映画・映像など, コンテンツをつくり発信する.

学習者・訪問者の受け入れ

このコンテンツから学んで訪問する人々, 訪問者・観光客を受け入れ, 現場の拠点との持続的な交流を図る.

2. 「文化による『まちづくり』」の4拠点.

このセンターを支えるのは, 文化クラスターと呼ばれる4つの人材拠点です. 人材拠点では, 現場の実践とともに, 絶えず研究教育活動が行われていて, 社会人を基軸に, 相互の学習を行います. ここでは, 「文化による『まちづくり』」の共通理念を持った, ほぼ, 4つの分野からなる, 地域の構成拠点が展開し, 各拠点を担う専門家が広場で交流し, 討論し, 共通の課題を発見して実践します.

それらは,

A = 学術・芸術・文化財人材拠点. 市民大学院・生涯学習学校, 図書館・劇場・文化財など.

B = 地産地消型・地域産業交流人材拠点.

例 = 漁場, 山林, 特産農業生産物・加工場・販売場・レストラン・料理文化・建築文化・街並み文化

C = 福祉人材拠点. 地域障害者施設, 地域包括ケアセンター, 病院.

D = 水・緑・自然エネルギー・環境リサイクル人材拠点. 景観と自然保護, 文化環境整備活動, 自然エネルギー供給システム.

これらは, 学・産・公共のネットワークが, 知識人・専門家・芸術家から, まちなみ・商店街・住宅地などの再生を担う, 建築家, 設計者など, 多様な人材を包括し, 水と緑の環境を再生し, 景観保全, 中山間地域振興事業, 文化財保護, から, 芸術文化振興事業を核とした事業.

さらには, コンテンツ事業や, 訪問産業・観光事業を展望しつつ, 地場産業や農林漁業再生事業, 工業団地再生, など, 生活文化産業を再生すること, などを示唆しています.

この図は、知識「結い」によって、それぞれの地域における共通の知的文化的基盤をつくることの重要性を示しています。ある意味では、世界の先端を走る「震災被害・貧困克服の社会的な規模での構想」といえるでしょう。

この図の中心にございますのは、先ほど来お話がございましたように、地域の人間復興と、コミュニティ再生です。

この真ん中に広場と書いてあるのは、その場のつもりでございまして、この場をつくるということの意味というものを、やはりこれからの社会科学は深めなければならないと思いました。

それまでは、どちらかというと、都市計画という言葉がはやっておりまして、上から計画をつくるというのが専らの発想であります。そうではなくて、人々が自由に振る舞って、自由に発達して、自由に行動しながら全体として、その結果が、先ほど植田先生がおっしゃいましたように、生活の質の向上を実現する。こういうふうに関場を設計して、これを構築する人間をつくらなければならない。これが今回の共同研究の結果、出てきました結論でございます。

従って、一人一人が文化資本を背負って、この場に登場される。お一人お一人の人生が凝縮されている。お一人一人の苦しみや悲しみや、これからやるべき課題、志、職人技、そういうものを引っ提げて、皆さん方が集まってこられる。その場をつくるにはどうすればいいか。やはり学・産・公共。昔は産官学と言ったのですが。

震災の国際的なシンポジウムなどで、よくいわれるらしいのですが、日本は民衆は世界一、学者は二流、政治家、官僚、経営者は三流と。そこで、二流でもないよりましだということで、学が前に出まして、学・産・公共ネットワークというものを、どのようにして各地域において構成していくか。この際のネットワークは開かれたネットワークであります。

いわば地域に根差した活動、地の人と風の人、まちづくりとはよく申しますけれども、地の人と風の人が、ここで交流しながら、広場をつくっていただいて、広場をつくるだけではいけません。皆さん自分でお金を出してくださいという話をしているところでございます。

このお金は出資というべきもので、日本で農村再生を実行した、二宮尊徳によりますと、金利をとらず、無利子・無担保。資金量だけを増やしてゆく。現場で、産業や建築など、実際に「協働」できる専門家を派遣し、共に、仕事をおこし、地域を創り、人を育て、文化を高めあう。これが、復興です。

そのための人材づくりを市民大学院はじめ、日本の大学人は真剣に取り組むべきです。多くの失業している若者たちの教育も含めて。

人材教育で、緊急性が高いのは、図にありますように、福祉拠点人材であります。この福祉というものは、まさに生活の質をつくり上げる日々の実践の中にありますので、これを各地域において、どのように構築するかということは決定的に重要である。

そして、右手に地産地消型の地域産業人材を結集して、左手に、水、実り、自然エネルギー、環境、リサイクル、拠点人材を結集し、この全ての知恵を学術、芸術、文化財に結集する。

こういう地域をつくっていくことによって、地域の再生の可能性を開いていきたいというこ

とでございます。

貴重な復興構想を世に出そう

お手元に私たちの震災復興構想というのがございます。これは昨日、事務室で準備し、荒木一彰君が寝ないでつくったものです。最近の若者は力がありますね。これまでの研究成果を非常に丁寧にまとめていただきました。いまの若い人がつくると、ちゃんとイラストが入りまして、大変立派なものができております。それから、もう一つの方は、論文と、研究会諸氏の御研究をまとめました。

鎮魂碑を創る

いままでの議論の中で一番私どもに共感を呼んで、これは先日堀田先生も来ていただいたときに、大いにお褒めをいただきましたが、われわれの研究会の第一番の成果は、具体的な提案の形を取った鎮魂碑の建立です。これを、現地の廃材を活用して、これをいかにつくるか。

これを緊急にどのようにつくるかということが、何よりも日本人の生きるための拠りどころを創ることである。これこそ、地域における、地域再生の原点であるというご主張がございました。非常に、立派な内容です。朝日新聞の公募にも応じたのですが採用されませんでした。不思議に感じております。政府の震災復興の審議の機会にも取り上げてくれないかなと思ったのですが。

オランダから学ぶ

それから2番目に、オランダの空間設計政策を研究なさっている専門家が、現地に行ってくださいました。オランダというのは、まさに災害との戦いのような国土を構築する。いまこの経験から学んで、地域の現場からの再建の方法を考えようというご提案です。これは非常に立派なご提案だと思います。

ナショナル・トラスト

それから、ナショナル・トラスト方式による土地利用計画。先ほども池田先生から土地を勝手に政府が押さえるという話がありましたが、やはり土地の共同利用を展開せざるを得ないわけだから、個々人の意思を尊重しながら共同で土地を活用するナショナル・トラスト方式で土地利用計画をやって行って、それを震災復興と結び付けるのだというご提案であります。非常に魅力的な提案だと思います。

環境税とコミュニティ基金

それから、環境税ですね。これは山田浩之先生からご提案がございまして、電源開発のため

の税から、環境税への転換を図る。

それから、文化によるまちづくりコミュニティ基金。この基金で地域の再生の総合的な構想をつくる。補助金に依存せず、自分たちで国内、世界から、資金を集めて構想を立てる。出資者にも構想への参加をお願いする。専門的な人材を育成しながら、現場の創意工夫を生み出す経営を生み出す。

地域包括ケア・エネルギー問題・汚染除去技術開発

地域包括ケアと人間復興。これは堀田先生の念願のご主張でございまして、被災地でこそ、24時間ケアをやれというご提案です。非常に積極的なご提案でございました。

次に、エネルギーの多様化構想。これは提案にもございます。地域再生のための水力の利用。特に日本においては、小規模な水力発電の有効性が非常に高い、とのご提案。

次に、放射性物質除去のための技術研究。現在、この研究開発につきましては、大阪で復興連絡会という協議会をつくりまして、そこで研究を開始しております。いまのところ、土壌汚染を排除する方法がないのかというので、いろいろと調べていただいております。バクテリアを使った方法とか、いろいろとあるのですが、それを研究開発して、土壌汚染などに正面から立ち向かいたい。

このほかにも、貴重なご提案がございしますが、本日、大要をご紹介申し上げます。今後の御研究の中で、生かしていただきますようお願い申し上げます。ありがとうございました。